

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 17 日現在

機関番号：32653

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26861941

研究課題名(和文)小児看護領域における継続教育研修プログラムの作成に関する研究

研究課題名(英文)Implementation of continuing education program for pediatric nursing for clinical nurse

研究代表者

山田 咲樹子(YAMADA, SAKIKO)

東京女子医科大学・看護学部・臨床講師

研究者番号：20723191

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：成人患者が多くを占める施設では、臨床での小児看護継続教育に関して各施設で試行錯誤して行っている現状がある。そこで本研究は、小児看護領域の継続教育を実施するためのプログラムを構築することを目的に行った。基礎調査の結果、小児専門施設以外では小児看護に特化した研修を実施している施設は少なく、小児看護の質の担保や安全性の確保には、一定レベルの小児看護継続教育が重要であると示唆された。また看護師は、経験年数により学習内容のニーズが異なった。これらから、日本看護協会が提示するクリニカルラダーに合わせた学習項目を検討し、小児専門施設以外での継続教育プログラムを構築した。

研究成果の概要(英文)：Hospitals addressing mostly adults are doing continuous education for pediatric nursing in clinical practice by trial and error. This research was conducted to implement the program to do continuous education in the field of pediatric nursing. The basic research found that there are only a small number of hospitals providing the training specialized to pediatric nursing and the continued pediatric nursing training of certain level is critical to guarantee the quality and safety of pediatric nursing. Nurses have different training needs depending on their years of experience. By reviewing those needs, we examined the curriculum according to the clinical ladder presented by Japanese Nursing Association, and implemented the continuous education program for non-pediatric hospitals.

研究分野：小児看護

キーワード：継続教育 院内研修 小児看護 研修プログラム

1. 研究開始当初の背景

医療機関における看護継続教育の重要性は周知の事実であり、看護師に対する教育は多くの施設で行われている。この看護継続教育の質を向上させるために、日本看護協会は「看護継続教育の基準」を2000年に策定した。さらに近年の少子高齢化の進展、医療技術の躍進など医療や看護を取り巻く環境は大きく変化し、この状況に対応するため、2012年に継続教育の基準をver.2に更新した。

小児看護領域においても、医療の先進に伴い、看護師に対してより高度で専門性のある知識・技術・倫理観が求められ、専門的な教育が必要とされている。しかし、成人患者が多くを占める施設では、臨床での小児看護継続教育に関して各施設で試行錯誤して行っている現状がある。

新人看護師研修に関しては、2009年7月に「保健師助産師看護師法」および「看護師等の人材確保の促進に関する法律」の一部改正を受け、厚生労働省において2009年12月に「新人看護師研修ガイドライン」が公表され、2010年4月1日から新人看護職員の臨床研修などが努力義務となった。

経験者に対する継続教育に関しても2015年の「看護師等の人材確保の促進に関する法律」改正により、看護職は専門職業人として免許取得後も研修等に参加し、資質向上に努める責務が明文化され、看護職の臨床研修等の努力義務化が打ち出された。米国などの諸外国においては、看護師の免許更新制度が設けられ、看護師は自身の免許更新のため計画的に継続教育プログラムに参加し、その教育プログラムの質の保証も重視されている(渡邊,2017)。しかし、日本には免許更新制度がないため、看護職の資質の維持・向上は、個々のモチベーションや職場環境に委ねるところが大きい。

以上より、小児看護領域において専門性のある研修の必要性は明らかになっているが、具体的な問題点や看護師の学習ニーズは明確ではなく、体系的な継続教育に関して学術的に明らかにした研究は見当たらず、具体的なプログラムの提示もされていないことから、小児看護継続教育プログラムを構築するという本研究の着想に至った。

2. 研究の目的

本研究では、小児看護領域の継続教育に関する医療施設の現状と現任教育者や管理者の認識を明らかにして問題点を明確にすること、小児看護に関わる看護師の学習ニーズを明らかにし、それを促進、阻害する要因の探索と検証を行うこと、以上の2点を通して、臨床でのニーズと学術的根拠に基づいた実行可能な「臨床看護師に向けた小児看護継続教育プログラム」を構築することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、まず小児看護領域における継続教育の現状と課題を明らかにするため、全国の医療施設における小児看護継続教育と研修に対する現任教育者や管理者の認識を調査し、プログラムに必要な基礎情報を収集した(基礎調査)。次いで、小児看護を実践する看護師の学習ニーズと必要な教育環境や課題を明らかにするために、看護師の学習ニーズや継続教育に対する認識を調査し、必要な継続教育の内容について検討した(基礎調査)。これを踏まえ、日本看護協会が提示するクリニカルラダーに合わせて、小児看護の知識と技術を習得するために必要な学習項目を図式化し、検討と修正を繰り返した。以下に詳細について述べる。

(1) 基礎調査 : 小児看護領域における継続教育の現状と課題を明確にする

対象は、全国の大学病院・総合病院(以下、大学病院他)で小児病棟を有し、病床数600床以上の医療施設193施設の中で、院内全体の状況を把握している看護師および院内研修の企画・実施に主に携わる看護師とした。調査は、施設基本情報、対象者基本情報、厚生労働省の新人看護職員研修ガイドラインを基に作成した小児看護継続教育の実施内容、継続教育や研修の必要性や認識に関する独自の選択式質問項目と自由記載について無記名の質問紙調査を実施した。大学病院他での課題を明確にするため、ここでは小児専門病院は除外した。分析は、得られた回答の中から小児看護継続教育の実施内容および小児看護継続教育や研修の必要性および認識に関する質問項目の単純集計と自由記載の内容分析、基本情報と継続教育の必要性および認識との関連性の単純分析を行った。

(2) 基礎調査 : 小児看護領域における看護師の学習ニーズと教育環境の課題を明確にする

対象は、全国の大学病院・総合病院で小児病棟を有し、病床数600床以上の医療施設176施設(前調査において病棟編成などで小児単科病棟を有していないことが明らかになった施設を除いた)の中で小児看護領域に携わる看護師と、小児専門病院(以下、小児病院)16施設に所属する看護師とした。質問紙の配布は1施設につき3名分(計576名)を看護部長へ送付し、経験年数が偏らないよう依頼した。調査は、小児看護継続教育の受講状況、研修への要望や学習ニーズに関する独自の選択式質問項目と自由記載について無記名の質問紙調査を実施した。分析は、得られた回答の中から対象施設と対象者の基本情報、小児看護領域における研修の受講状況、研修への要望や学習ニーズについて単純集計と自由記載の内容分析を行った。ここでは、入職時より小児看護領域で働く看護師と、配転により現在小児病棟・小児病院で働く看護師(以下、配転者)は、学習ニーズが異なると考え別々に分析を行った。

(3) プログラムの作成と小児看護専門看護

師のワークショップ

基礎調査をもとに、研究コアメンバーで「小児看護継続教育プログラム案」として、小児看護の技術や知識に必要な学習項目を図式化した。図式化には、基礎研究で得られた学習ニーズと文部科学省が提示する新人看護職員研修ガイドラインに記載されている項目を小児版として考察した項目、また基礎教育で使用する多数の「小児看護学」の教科書に記載されている学習項目を参考にした。研究コアメンバーである小児看護専門看護師3名と小児看護の経験に長けている看護師1名で内容を検討して修正した後、全国約100名の小児看護専門看護師の中から、継続教育に関心のある協力者を募り、研究コアメンバーに加えて5名の小児看護専門看護師と、小児看護専門看護師養成課程において継続教育を研究テーマとしている学生を含め10名で最終案についてワークショップを開催し、専門的な視点から学習項目の追加やクリニカルラダーとの整合性、またプログラム案の活用方法に関して意見交換を行い、修正を加えて「小児看護継続教育プログラム」を作成した。

4. 研究成果

【基礎調査】小児看護領域における継続教育の現状と課題に関する調査

99施設(回収率51.2%)から回答を得た。小児系部署の総病床数50床以上の施設が半数近くを占め、小児系部署の総スタッフ数40人以上の施設が54施設(54.6%)と最も多かった。回答を得た対象者のうち、管理職または教育担当者になる前に小児看護の経験がある者は58名(58.6%)で平均8.9年であり、管理職または教育担当者になってから小児看護の経験がある者は68名(68.7%)で平均3.6年であった。

(1) 小児看護継続教育の実施内容

小児病棟に配属される新人看護師の研修について、52施設(46%)が成人の研修と区別せず実施しており、小児のみを対象とした研修を行っている施設は14施設(12%)と少数であった。厚生労働省の新人看護職員研修ガイドラインを基に作成し、小児看護に関する技術や知識を18項目に区分した独自の選択式質問項目の全てにおいて、半数以上が分散教育を実施しており、集合研修で実施している施設、さらには小児のみを対象とした集合研修で実施している施設は少数であった。小児のみを対象とした集合研修を行っていない理由として、「参加者が少ない(22.3%)」「研修時間の確保ができない(22.7%)」「参考になるプログラムがない(14.8%)」が上位に挙げられ、「時間の確保ができる」「ニーズがある」「教えられる人がいる」「参考になるプログラムがある」などの条件がそろえば実施できると考えていた。

(2) 小児看護継続教育の必要性や認識

小児病棟に配属される新人看護師の研修

について、64名(65%)が「成人と区別して行う必要がある」と回答し、理由に小児看護の専門性や特殊性が挙げられた。28名(28%)は「成人と区別して行う必要がない」と回答し、集合研修では基本姿勢や態度など臨床実践能力に必要な基礎を学び、小児看護の専門性や特殊性は分散研修で学習する必要があると考えていた。一方で、「成人と区別して行う必要がある」と回答した群のうち、半数以上が当該施設における小児看護の研修は「十分でない」と回答し、時間や人員の確保の困難さ、OJTでの教育に任せている現状から、各部署での根拠に基づいた教育は十分ではないと感じていた。さらに、管理職または教育担当者が小児看護経験者であると、小児看護の特殊性への認識があり、成人と区別した教育が必要であると感じていることもわかった。

【基礎調査】小児看護領域における看護師の学習ニーズと教育環境の課題に関する調査

大学病院他からは221名(回収率41.8%)、小児病院からは29名(回収率60.4%)から回答を得た。上記回答者250名のうち、入職時より小児看護領域で勤務する看護師の有効回答数は大学病院他104名(有効回答率47.0%)、小児病院24名(有効回答率82.7%)であり、平均看護経験年数は、大学病院他5年3か月、小児病院8年3か月であった。一方、成人看護の経験があり、配転者の有効回答数は83名(有効回答率38.0%)で、平均看護経験年数は19.2年(小児看護の平均経験年数は8.8年)であった。

(1) 入職時より小児看護領域で働く看護師の研修受講状況と学習ニーズについて

研修受講状況

大学病院他に所属し、入職時より小児看護領域で働く看護師に関して、厚生労働省の新人看護職員研修ガイドラインを基に作成した小児看護の技術や知識に関する18項目において、最も受講が多かったのは「小児の救急蘇生処置技術(85.6%)」であった。次いで「小児のフィジカルアセスメント(70.2%)」「小児の呼吸循環ケア(67.3%)」「小児の症状・生体機能管理(65.4%)」「小児の与薬技術援助(57.7%)」「小児のための感染予防技術・感染症患者への対応(53.8%)」「小児の成長発達と看護(53.8%)」であり、それ以外の11項目を受講した者は2~4割程度だった。18項目全てにおいて、半数以上が「所属部署の勉強会(分散研修)」に参加しており、「院内研修」で受講したと回答した者は3割に満たなかった。受講していない項目については「興味があり今後参加したい」と考えており、「院内に研修がない」ため興味はあるが受講していない現状があった。一方、小児病院に所属する看護師では、大学病院他同様の18項目において、「小児の排泄援助(45.8%)」「小児の清潔ケアや寝衣交換(41.7%)」以外の16項目は半数以上が受講しており、「小児

の与薬技術援助（91.6%）」「子どもの権利（91.6%）」「小児の救急蘇生処置技術（95.8%）」「小児のための感染予防技術・感染症患者への対応（95.8%）」においては受講した者は9割を超え、それ以外の項目でも高い受講率を認めた。18項目全てにおいて、半数以上が「院内研修」で受講しており、「院内に研修がない」ため受講していないと答えた者は少数であった。

学習ニーズ
 今後研修を受けたい学習項目に関して上記18項目以外の内容を質問した結果、【疾患に関すること】【小児看護の基礎】【家族看護】【虐待】【終末期看護】【在宅看護】【その他】のカテゴリーに分類された。大学病院他の経験年数別では、1~4年目の看護師は【疾患に関すること】が最も多く、次いで【小児看護の基礎】が多かった。また、5~8年目の看護師も【疾患に関すること】が最も多く、その他は【虐待】や【終末期看護】など様々なテーマがあがった。一方、9年目以上の看護師では【疾患に関すること】へのニーズはなく、【虐待】や【在宅看護】のほかに、倫理や退院支援、社会保障など多岐にわたる意見が多かった。小児病院では、全年代を通して【疾患に関すること】は少なく、【家族看護】【虐待】へのニーズは高いものの、年数毎の特徴は見られなかった。

(2) 配転して小児看護領域で働く看護師の研修受講状況と学習ニーズについて

研修受講状況

配転者で最も受講が多かったのは「救急蘇生処置技術（81.9%）」であった。次いで「症状・生体機能管理（56.9%）」「感染予防技術・感染症患者への対応（53.0%）」「呼吸循環ケア（51.8%）」の受講率が高く、その他14項目を受講した者は半数以下だった。多くは「所属部署の勉強会（分散研修）」に参加しており、「院内研修」で受講した者は3割に満たなかった。しかし、「家族看護」「コミュニケーション技術」については、「院外研修」に参加している者も多かった。

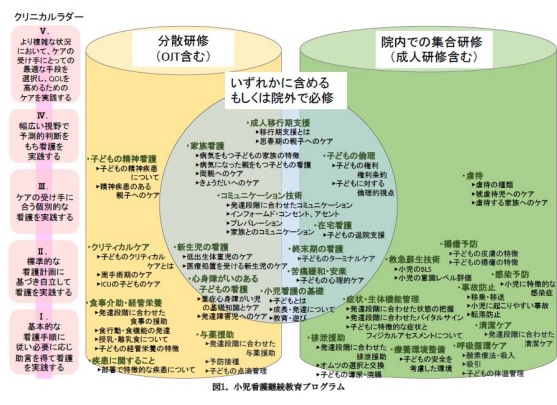
学習ニーズ

今後受けたい学習項目に関しては、大学病院他9年目以上のニーズと同じ【虐待】【在宅看護】【家族看護】が多かったが、同時に【疾患に関する事】のニーズも高く、配転者は基礎的な内容から応用看護まで幅広くニーズがあることがわかった。

【臨床看護師に向けた小児看護継続教育プログラムの作成】

小児看護継続教育プログラムは、日本看護協会のクリニカルラダーに合わせ、各段階で必要な学習項目を設定した。基礎調査をもとに、厚生労働省が提示する新人看護職員研修ガイドラインの項目のうち、実際に受講した経験年数やこれから受講する予定の学習項目と今後の学習ニーズを検討した。また、基礎調査から小児看護継続教育プログラムを成人看護とは別とした継続教育プログラム

とすることは臨床現場の現状に則さないことが明らかになった。このことから、成人患者を対象とした集合研修に含めることが可能である内容、実際に含めて行われている内容を「院内での集合研修（成人研修含む）」とし、部署での分散研修で学習することが可能な内容を「分散研修（OJT含む）」という2本の柱で構築した。また、この両者に含まれることが多かった学習項目や、実際に院外で受講したと回答した人が多かった学習項目を「いずれかに含めるもしくは院外で必修）」として、プログラムを構築することで、臨床現場で実際に行うことができる内容とした。（図1）



5. 主な発表論文等
 （研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

- 〔学会発表〕(計 5 件)
- (1)高木志帆, 山田咲樹子, 木村ゆみ子, 中山紗野子: 小児看護領域における継続教育研修プログラムの作成に関する研究第二報 - 小児看護領域で働く看護師の学習環境の現状 -, 日本小児看護学会第 26 回学術集会, 2016
- (2)山田咲樹子, 高木志帆, 木村ゆみ子, 中山紗野子: 小児看護領域における継続教育研修プログラムの作成に関する研究第三報 - 看護師の学習ニーズと院内研修に対する満足度 -, 日本小児看護学会第 26 回学術集会, 2016
- (3)山田咲樹子, 高木志帆, 木村ゆみ子: 小児看護領域の配転看護師の学習ニーズと研修満足度調査, 東京女子医科大学看護学会第 12 回学術集会, 2016
- (4)高木志帆, 山田咲樹子, 木村ゆみ子: 小児領域へ配転して働く看護師の学習環境の現状, 東京女子医科大学看護学会第 12 回学術集会, 2016
- (5)高木志帆, 山田咲樹子・他 1 名: 小児看護領域における継続教育研修プログラムの作成に関する研究第一報 - 小児看護領域における継続教育研修の現状 -, 日本小児看護学会第 25 回学術集会, 2015

6. 研究組織

(1)研究代表者

山田 咲樹子 (YAMADA, Sakiko)
東京女子医科大学・看護学部・臨床講師
研究者番号：20723191

(2)研究協力者

高木 志帆 (TAKAGI, Shiho)
木村 ゆみ子 (KIMURA, Yumiko)
中山 紗野子 (NAKAYAMA, Sayako)